

令和5年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

2-2 「大阪市版チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

3 「大阪市英語力調査（GTEC）」の調査の目的

- (1) グローバル社会において活躍し貢献できる人材の育成をめざし、生徒の英語力の充実・向上を図るため、本市教育振興基本計画に基づき、生徒に求められる英語力や学習の習熟過程等を把握・検証する。
- (2) 生徒が自らの英語力を的確に把握するとともに、生徒の英語力の実態を分析することにより、各学校における学習指導の充実や改善、工夫に役立てる。

4 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

令和5年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

1 全国学力・学習状況調査

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)			平均無解答率(%)		
			国語	数学	英語	国語	数学	英語
3 年	学校	77	64	45	36	4.0	11.2	8.0
	大阪市	—	67	49	44	5.2	11.0	6.6
	4月18日 全国	—	69.8	51.0	45.6	4.6	9.6	5.7

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
3 年	学校	79	57.7	50.3	44.8	44.5	47.1	12.3	3.6	12.6	9.5	8.7
	大阪市	—	62.3	54.2	51.9	47.8	54.3	9.9	2.9	10.6	8.0	6.2
	9月5日 大阪府	—	62.1	54.7	52.2	47.6	54.2	10.3	3.1	11.2	9.0	6.5
2 年	学校	88	59.9	54.8	43.0	33.8	51.8	9.9	2.4	13.5	12.1	9.5
	大阪市	—	66.7	54.6	52.2	40.6	57.2	8.2	3.2	11.2	10.4	8.6
	1月10日 大阪府	—	66.8	54.2	52.2	40.2	57.1	8.3	3.5	12.0	11.3	8.9
1 年	学校	64	53.5	52.6	46.2	58.0	55.4	13.2	6.8	11.2	2.9	6.0
	大阪市	—	60.6	56.0	55.4	62.2	64.1	8.7	5.2	9.1	1.7	4.3
	1月10日 大阪府	—	60.8	—	54.7	—	64.1	9.6	—	10.3	—	4.9

※ 1年生の社会・理科については、「大阪市版チャレンジテストplus」として実施

※ 1年生の理科は化学的領域を選択

※ 2年生の社会はA問題を選択 2年生の理科はA問題を選択

※ 3年生の理科はC問題を選択

3 大阪市英語力調査 (GTEC)

学年 実施月日		生徒数 (人)	読むこと 【リーディング】	聞くこと 【リスニング】	書くこと 【ライティング】	話すこと 【スピーキング】
			(スコア)	(スコア)	(スコア)	(スコア)
3 年	学校	72	89.2	104.6	129.0	107.0
	10月19日 大阪市	—	101.3	107.7	137.9	102.2

4 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

学年	生徒数 (人)	握力	上体 起こし	長座 体前屈	反復 横とび	20m シャトル ラン	持久走 男子1500m 女子1000m	50m走	立ち 幅とび	ハンドボール 投げ	体力 合計点
	102	(kg)	(数)	(cm)	(点)	(回)	(秒)	(秒)	(cm)	(m)	(点)
2 年 男 子	学校	28.85	30.87	47.35	56.85	91.70	—	7.49	203.55	24.26	49.64
	大阪市	28.62	26.21	42.04	51.65	79.05	—	8.05	194.78	19.88	40.79
	全 国	29.02	25.82	44.16	51.22	78.07	—	8.01	197.02	20.40	41.32
2 年 女 子	学校	27.43	24.78	46.70	48.05	54.48	—	8.42	171.63	13.72	54.57
	大阪市	23.11	22.12	44.78	46.25	52.11	—	9.03	165.29	12.10	46.99
	全 国	23.15	21.62	46.27	45.65	50.70	—	8.95	166.29	12.43	47.22

調査結果から

○令和5年度 全国学力・学習状況調査 結果より

【成果と課題】

〔国語〕

平均正答率は64%で、大阪府に対して4%、全国に対しては5.8%下回る結果となった。問題別に分析してみると、大阪府の正答率を上回った問題が3問あった。分野・領域上の傾向は見られず、いずれも選択式の問いであるというのが共通点であった。一方で、大阪府平均を大きく下回ったのが、文脈に即して正しい漢字を答える問い、古文で歴史的仮名遣いを直す問い、提示された資料を読んで表現の工夫について記述する問いの3問であった。単純な知識不足でもあるが、身に付けた知識・技能を正しく選択・活用する能力、文章の要旨や筆者の意図をくみ取って表現する能力に課題があることが分かる。また、ある程度の知識は身に付けているつもりがうろ覚えになっていたり、適切に活用できていなかったりと、定着にまで至っていないのが実情であると分析できる。

〔数学〕

本学年は特に関数分野の平均点を向上させることを目標に指導してきた。しかし、結果的には関数分野の平均点は10ポイント近く大阪府の平均から下がっている。一方で、図形分野とデータの活用分野に関しては、平均点から5ポイント以内の差となっている。関数分野の基本的な問いに対する正答率が15ポイント近く府の平均から下回っていることが一因であると考えられる。一年生時に学習した反比例の内容である。このときの習熟度でいえば定期テストの点を見ても多くが理解できていた内容だと思うが、復習の機会を適宜設けられていなかった。図形とデータの活用分野は、内容自体が少ないため、復習は容易であることから、差の開きが少なかったのではないかな。

〔英語〕

本校の平均正答率は36%であり、全国平均45.6%を大きく下回っていた。

領域別に見ると、「聞くこと」では、正答率が全国平均を上回る、また同程度の問題もあったが、「読むこと」「書くこと」ではいずれも平均正答率を下回っていた。また、記述式、短答式の問題で、条件を満たさない回答や無回答が多かった。

生徒質問紙では、「英語の勉強が好き」「英語の授業がよくわかる」と答える生徒の割合が全国平均よりも高く、英語学習への関心は高いと思われる。

【今後に向けて】

〔国語〕

漢字や語句、ことわざ・慣用句、古語や歴史的仮名遣いの直し方といった基本的な知識については、練習プリントや小テストなどで繰り返し学習し、しっかりと定着させていく。また、複数の資料を関連付けながら、根拠をもとに自分の考えを形成し、表現するといった学習を、これまで以上に積極的に授業に取り入れていきたい。

〔数学〕

授業内で、1・2年生の範囲の復習を取り入れていく。そのノウハウを学校の数学科教員と共有して、3年間を見通した授業計画に取り入れる。また、スパイラル学習を強く意識しての授業作成にも取り組む。

〔英語〕

特に「書くこと」についての指導を重点的に取り組みたい。基本的な単語の習得や文法の理解を深め、短答式問題での正答率を上げる。また、普段の授業で自分の考えを英語で表現する機会を多く持つ。その際「条件を満たす回答方法」「英作文で使える表現」などにも習熟させ、論理的でまとまりのある英語の文章を書けるように、より丁寧な添削指導を行っていきたい。

令和5年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

○令和5年度 3年生チャレンジテスト 結果より

【成果と課題】

〔国語〕

平均点は大阪府と比較して4.4ポイント下回っていた。しかし、33設問中、府の正答率を上回った問いも8問あり、特に手紙の書き方や敬語の扱い方など実用的な技能に関する設問で成果を見せることができた。

また、無解答率を見ても全体の半分以上で府平均を下回っており、テストにおいて最後まであきらめずに臨む姿勢がしっかりと身についていることが分かる。

〔社会〕

平均点は大阪府と比較して、4.4ポイント下回った。観点別では、知識・技能が－3.8、思考・判断・表現－0.7、問題形式別では、選択式が－2.9、短答式が－1.4、記述式が－0.1であった。

日々の授業で、資料から考える問題、自分の言葉で説明する問題に取り組むようにしているので、思考・判断・表現の観点や記述式の問題の正答率が、比較的大阪府平均に近かったことが成果としてあげられる。1つ1つの問題を見ても、表や資料を読み取る問題については、大阪府平均を上回る正答率のものがあつた。

〔数学〕

大阪府の平均が52.2点、本校の平均は44.8点でマイナス7.4ポイントとなった。各領域の平均点の大阪府との比較は以下の表である。

「数と式」は－1ポイント、「図形」は－2.6ポイント、「関数」は－1.7ポイント、「関数」は－2.1ポイントとそれぞれマイナスの結果となった。本年は目標として、「数と式」の分野で府の平均をこえることをあげていた。そこで28点の配点中1ポイントの差は、重点的に指導してきた成果だといえる。しかし、目標を達成できてはおらず、課題は残る。

一方で、前年度から「関数」分野におけるマイナスは広がっている。前年度の結果分析と成果から考えると、分野ごとに重点を置き授業を展開することで、その効果を十分に得られるということだといえる。記述式の問いに関する平均点は府の平均から見て上回っている。これに関しても授業内で、説明する場面を多く設定したことによる効果だと考える。

〔理科〕

「大阪府平均:47.6点・本校44.5点」という結果であり、大阪府の平均点から3.1点下回った結果となった。昨年度は－5.7点

今回の設問では、「エネルギー領域」で大阪府の平均を0.3点上回った。昨年度のチャレンジテストでも、大阪府の平均を上回っていることから、理解を深められている生徒が比較的多いものと考えられる。

反対に「物質領域」では、大阪府と比較して、本校の無回答率が高かった。このことから、今回出題された【質量パーセント濃度・密度】の考え方について、深く理解ができていない生徒が多いこと。何を答えてよいか、覚えるべき用語が定着していないことが読みとれる。

さらに、得点分布グラフを見ると、20～24点の層・45～49点の層と70～74点の層が多い。20点台、40点台の生徒に沿うような支援を考え、70点台の生徒を伸ばしていけるような指導を考えていく。

〔英語〕

・平均点は47.1点で、大阪府(54.2点)と比較して、7.1点下回った。

・領域別にみると、「聞くこと」-1.2、「読むこと」-1.8、「書くこと」-4.1となっており、「書くこと」において最も平均が低い。

・「書くこと」及び「記述式」で答える問題で、正答率が府平均より特に低く、また無回答率が高くなっている。

・昨年度に比べ、「聞くこと」の領域では-1.8から-1.2と若干向上した。

・「聞くこと」「読むこと」の問題では、府平均より正答率が上回っている問題もあつた。また、「思考判断表現」の問題のほうが、「知識技能」の問題よりも平均得点率が高かった。

【今後に向けて】

〔国語〕

本校の正答率を分析すると、大阪府の正答率を10ポイント以上下回っていた設問が8問あり、そのうちの6問は漢字や語句の知識に関するものであつた。中でも漢字の読み書きにおいては6問中の3問で20ポイント以上の開きがあつた。それが全体の平均点の差にも影響したとみられる。漢字の知識と語彙力については、日常的にさまざまな種類の文章に触れてきた経験の差が大きく表れやすい。高校入試に向けても、あらためて基礎的な知識・技能の復習を中心にした学力の底上げを図っていききたい。

〔社会〕

単純に知識を問う問題や、複数の知識を組み合わせで答える問題については、正答率が低かった。重要事項については繰り返し反復して覚える作業が必要であるが、社会科においては3年間の授業内容を消化するだけでかなり時間がぎりぎりなので、知識の定着のために十分な時間がとれていない。知識定着のためにいかに時間を確保するかが今後の課題である。

〔数学〕

分野ごとに平均点を上回れていないことから、やはりテストで得点するための授業の実施を強く意識する必要がある。つまり、家庭学習を促しつつも、演習の時間を授業内で多くとり、問題を解くことに慣れていくことを授業の主においていく。

〔理科〕

分野によって、生徒の興味関心や想像力の度合いに差が見られることが課題であるが、共通して生活に密接であること。ポイントを押さえて反復練習していけば、対応力も高まり、得点につながることを感じさせるよう継続して指導を続ける。

〔英語〕

・英語科においては、今後、特に「書くこと」についての指導を重点的に取り組みたい。基本的な単語の習得や文法の理解を深め、短い英文を確実に書けるように繰り返し反復練習を行っていく。

調査結果から

○令和5年度GTEC 結果より

【成果と課題】

GTECのトータルスコアでは、CEFR A1レベル相当以上の生徒の割合は52.1%となり、昨年度より向上した。また、「話すこと」の平均点が大阪市平均より4.8ポイント上回った。新出文法を使ったペアワークや、スピーチなどのパフォーマンステストを授業で3年間行っており、積極的に英語表現をする力がついてきたと思われる。昨年度と比較すると、「話すこと」「聞くこと」の平均点は上回っているが、「読むこと」「書くこと」の平均点は下回った。特に「読むこと」の平均点が大きく下回っている。基本的語彙の習得と、文脈をつかむ練習が必要である。

【今後に向けて】

一定の成果があった「聞く」「話す」の授業でのアクティビティは今後も続けていく。「読むこと」に関しては、まず1年生の時から、基本的な語彙の習得とともに、初見の英文をたくさん読む機会を作る。また「読み取った内容から自分の考えを書く」「自分の考えを書いたものを読み合う」といった「読む」「書く」を融合した活動も取り入れていきたい。

○全国体力・運動能力、運動習慣等調査 結果より

男子体力合計点については、全種目において全国平均(+8.32)・大阪市平均(+8.85)を上回った。「運動やスポーツをすることは好きですか」について、肯定的回答は全国平均、大阪市平均と比較して上回っている。①「あなたにとって運動やスポーツは大切ですか」については80.4%が「大切」と回答、②「体力テストの結果や体力の向上について、自分なりの目標を立てていますか」については96.4%が「目標を立てている」と回答し、全国平均を①は約13%②は約25%と大幅に上回っている。この結果から生徒が自身の体力・運動への興味・関心が高いことがわかる。また、「保健体育の授業は楽しいですか」については97%が肯定的な回答をしており、日頃の授業から主体的に取り組んでいることもわかった。このように、本校生徒は体力・運動に対して意識の高い生徒が非常に多いことが、今回の調査結果につながっていると考えられる。1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合については、全国平均、大阪市平均と比較し割合は少ない。女子体力合計点については、全種目において全国平均(+7.35)・大阪市平均(+7.58)を上回った。「運動やスポーツをすることは好きですか」については47.5%が「大切」と回答しており全国平均、大阪市平均と比較してやや下回っている。②「体力テストの結果や体力の向上について、自分なりの目標を立てていますか」については77.5%が「目標を立てている」と回答し、全国平均を約10%上回っている。この結果から生徒が自身の体力・運動への苦手意識がある生徒が多いと考えられる。また、「保健体育の授業は楽しいですか」については80%が肯定的な回答をしており、日頃の授業から主体的に取り組んでいることもわかった。このように、本校生徒は体力・運動に対して意識の高い生徒が非常に多いことが、今回の調査結果につながっていると考えられる。1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合については、全国平均、大阪市平均と比較し、ほぼ同じであった。男女とも、今後は生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成に取り組み、課題の改善に努めていきたい。

令和5年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

○令和5年度 2年生チャレンジテスト 結果より

【成果と課題】

〔国語〕

本校の生徒の平均点は59.9点であり、大阪府平均点を6.9点下回ったものの、前年度1年生の平均点より8.3点上昇した。中央値も前年度1年生の52.0点から+12.0点の64.0点に上昇しており、前年度と比較して学年全体の学力が上昇していることが感じられた。

得点率を問題形式ごとに分類した結果、選択式問題は66.5%（府平均73.1%）、短答式問題は62.2%（府平均69.3%）、記述式問題は32.6%（府平均約39.8%）となった。前年度1年生の結果と比較すると、選択式は+1.0%、短答式は+18.8%、記述式は+2.2%であり、いずれの形式でも割合が増加した。前年度と比較して短答式の得点率が特に大きく増加していることから、文章中から必要な情報を探す力や、文脈に合わせて適切な文を書く力が身につけていることがうかがえた。

一方で、文節の区切り方や歴史的仮名遣いなどの基礎的な問題を誤答している生徒の割合が大阪府全体の割合と比較して高いため、文法や言語の知識の定着が不十分な生徒が少なくないと感じられた。

問題形式ごとの無解答率は、選択式は0.4%（府平均1.7%）、短答式は15.3%（府平均12.1%）、記述式は35.6%（府平均26.3%）であり、選択式と短答式では前年度1年生を下回ったが、記述式では前年度より3.7%増加した。記述式問題を解答するために必要な時間を十分に確保できなかった可能性が考えられるため、試験中の時間配分に関しては今後の課題である。

〔社会A〕

R4年度は大阪市平均に対して、8ポイント程度下回っていたが、R5年度は大阪府平均に対して、0.6ポイント上回った。日々の学習の成果が結果として現れた。領域では、地理的分野に関しては大阪府平均を下回っていたが、歴史的分野に関しては大阪市平均を上回っていた。地理的分野の場合、学校で学習してから長く時間が経過していることで基本基礎的な知識を忘却していることも考えられる。しかし一番の課題は、グラフや資料の読み取りに関して、特に長い文章による説明が行われている問題の正答率が低く、読解力、思考力の低さであると考ええる。同時に考えを文章であらわすことも難しく記述式の問題も解くことが難しい。

〔数学〕

本校の平均得点は大阪府52.2点に対して43.0（－9.2点）点である。前年度の－11.7点から改善が見られた。

得点別分布の割合は、55点以上の分布が府の分布より少なくなっている。

評価の観点別得点率では「知識・技能」が51.3%を超えていることに対して、「思考・判断・表現力」は28.2%と低い。ただし、前年度の14.9%と比較すると改善がみられる。

問題形式別の得点率では、「記述式」が15.2%と他に比べて低いが、前年度の8.2%から改善がみられる。

前年度の大阪府との正答率の開きが最も大きかった計算問題について、正しい計算の仕方の確認とドリル学習を取り入れることで、今年度は大阪府の正答率との開きが大幅に改善された。

〔理科A〕

今年度の結果としては、「大阪府平均40.2点・本校33.8点」という結果であり、大阪府の平均点から下回った結果となった。昨年度のチャレンジテストplusの平均点では、大阪市と11.1点差であった。年度の大阪府平均との差が6.4点であったことをふまえると、学習への意欲が上昇傾向であると考えられる。

今回の設問では、「エネルギー領域」で大阪府の平均に迫る得点率であった。これより、本校生徒にとって、「物理（電気）」の分野は他の分野よりテスト前に学習した内容であり、知識として残っていたことがうかがえる。また、「粒子領域」と「生命領域」は大阪府の平均から離れた得点率であった。全体的に、記述式の無回答率が高くみられた。

さらに、得点分布グラフを見ると、15～29点の層がかなり伸び悩んでいることがわかる。この層を引き上げることができれば、学年としての平均点が向上することが見込まれる。

〔英語〕

府平均－5.3ポイントであったが、昨年度の1年の結果（－10ポイント）を大きく挽回できた。また昨年度の2年生（－6.4ポイント）を上回った。

今年度は音読指導に力を入れた。その成果もあってか、4技能（聞く、読む、話す、書く）のうち、“聞くこと”、“読むこと”は府平均に近い成績を出すことができた（聞くこと－0.7ポイント／読むこと－1.2ポイント）

しかしながら“英語を書くこと”が府平均を大きく下回る結果（－3.5ポイント）となり、課題が残った。

【今後に向けて】

〔国語〕

本校の成績としては前年度の平均点を上回っているが、大阪府の平均点と比較したとき、前年度は－7.0点、今年度は－6.9点であり、大きな変化は見られなかった。

次年度では府全体から見ても成績の伸びが感じられるように、書くことや読むことだけでなく、言語に関する基礎的な知識も確実に定着するような指導を進めていく。

〔社会A〕

読解力、思考力の向上には、読書をして語彙力を向上させながら、読解力を養うしかない。この読書の習慣が身につけている者が、得点が高いのは明白なので、読書をしなければならない。また、語彙力が上がることで表現力もあがり、自信を持つことでコミュニケーションをよりとるようになる。その表現の場を増やすことが記述式の問題にも答えることができる。社会の学習に対する本校の生徒の規律、責任感、意欲は高い。それにもかかわらず得点が低いのは、家庭学習の習慣の欠如からくる基本基礎的な知識の忘却、読書習慣の欠如による読解力、思考力、表現力の低さが要因なので、家庭でも学習する習慣、読書をする習慣を身につけさせるような取り組みすることも考えるべきである。

〔数学〕

「同位角の位置にある角について正しい記述を選ぶ」設問は、全設問中で、大阪府との正答率の開きが最も大きく、差は21.4%であった（〔本校〕30.7%、〔府〕52.1%）。同位角の意味を理解しているかを問う設問である。学習指導に当たっては、図形の位置関係を正しく理解することが苦手な生徒が多いので、色々なパターンの問題を多く取り入れることで、確実な定着を図る工夫がより一層求められる。「二元一次方程式のグラフの切片を利用し、三角形の面積を求める」設問は、全設問中で大阪府との無回答率の開きが最も大きかった。（〔本校〕61.4%、〔府〕42.6%）。二元一次方程式のグラフとy軸との交点の座標を求め、三角形の面積を求めることができるかを問う設問である。学習指導に当たっては、二元一次方程式から一次関数の形に式を変形し、x=0を代入する方法の確認する活動や式・グラフを用いて、二元一次方程式の仕組みの理解力を向上させる学習活動を有効である。

〔理科A〕

全体として、記述式の得点率が著しく低いことがいえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「考えを表現する力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。暗記するのではなく、実験や観察を通して解答を導くための方法を指導していく。

〔英語〕

“読むこと”、“聞くこと”については、継続して音読指導とリスニング練習などに力を入れる。

“書くこと”については、生徒に語彙力を高める必要がある。1、2年で学習した語句の復習を帯活動で行う、多くの語句を使って英語を書かせるなどして改善を図る。

また、“読むこと”と“書くこと”や、“聞くこと”と“書くこと”などを統合的かつ複合的に行う活動を積極的にを行い、生徒の書く力を向上させる。次年度は、今年度の3年生（－7.1ポイント）及び府平均を超えることをめざす。

調査結果から

○令和5年度 1年生チャレンジテスト 結果より

【成果と課題】

〔国語〕

分布の割合にばらつきがある。ピークが60～64点にあるものの、50～59点の人数が極端に低くなっている。大阪府の分布と比較して85点以上の分布はわずかではあるが上回っている。

言語に関する知識事項、漢字の問題については一定の成果が見られた。しかし、読解力に課題が見られた。本文を正しく読み取ることができていないために、記述式の問題でも本文の内容を要約することができていない。

〔数学〕

平均点が大阪市と比べて－8.5ポイントであった。学習指導要領の領域別平均点をみると、「数と式」で大阪市と比べて－3.7ポイント、「関数」で－4.1ポイントと大きく差が開いている。「図形」では大阪市と比べて－0.6ポイントと差が一番小さい。

得点分布グラフをみると、5点～19点の割合が14.1%であった。

この結果から言えることは、直近で学習した範囲の問題は正答率が高く、少し前に学習した範囲の問題では正答率が低い。実際に、1学期に学習をした「方程式」や2学期前半に学習をした「変化と対応」の問題で本校の正答率が大阪府の正答率を超えたものがないが、2学期後半に学習をした「平面図形」の問題では本校の正答率が大阪府の正答率を超えたものがある。特にチャレンジテスト前に復習をした問題ではそれを超えた問題が多くあった。

正答率が大阪府の平均と比べ著しく低かった問題のタイプは意味を説明したり表やグラフを読み取ったりするものであった。

〔英語〕

府平均－8.7ポイントであったが、昨年度の1年生（－10ポイント）を上回った。

1年生は、毎回授業でペアワークを行いながら、単語や短い英文を聞いたり読んだりし、また初見の英文を決まった時間で読んで問題を解くことに力を入れた。（“読むこと”と“聞くこと”）その成果もあつてか、4技能（聞く、読む、話す、書く）のうち、“聞くこと”は府平均に近い成績を出すことができた。（聞くこと－2.4ポイント）

しかしながら“読むこと”は、府平均－4.8ポイントとなり、課題が残った。

【今後に向けて】

〔国語〕

今後の学習指導にあたっては、（現在取り組んでいる）意見文、鑑賞文を書く言語活動を通して、語句の役割や表現の技法を理解した文章を書く力を育成したい。

〔数学〕

分析結果からやはり以前から課題であると考えている、家庭学習が大切である。家庭での学習時間が短いため学力の定着が難しい。今後家庭との連携をどのようにしていくべきかを考えていかなければならない。

また、20点未満の生徒が14.1%（9人）であるので、ここに分布する生徒には基本的な計算を徹底して解かせていかないといけない。

〔英語〕

“読むこと”、“聞くこと”については、継続して音読指導とリスニングの練習などに力を入れる。また、“読むこと”については、もう少し多くの初見の英文に触れさせること、語彙力を高める必要がある。“書くこと”についても、生徒に語彙力を高める必要がある。（府平均－1.6ポイント）今後は1年で学習した語句の復習を帯活動で行う、多くの語句を使って英語を書かせるなどして改善を図る。

また、“読むこと”と“書くこと”や、“聞くこと”と“書くこと”などを統合的かつ複合的に行う活動を積極的に行い、生徒の書く力を向上させる。次年度は、今年度の2年生（－5.3ポイント）及び府平均を超えることをめざす。

○令和5年度 1年生チャレンジテストplus 結果より

【成果と課題】

〔理科〕

今年度の結果としては、「大阪市平均62.2点・本校58.0点」という結果であり、大阪市の平均点から下回った結果となった。昨年度のチャレンジテストplusの平均点では、大阪市と11.1点差であった。今年度の大阪市平均との差が4.2点であったことをふまえると、1年次からの学習への意欲が高いと考えられる。今回の設問では、「粒子領域」で大阪市の平均に迫る得点率であった。これより、本校生徒にとって、「物質（化学）」分野では、実験を中心に体験して学ぶことができ、知識として残りやすい内容であることがうかがえる。また、短答で解答する正答率も大阪市の平均に迫る得点率であった。記述で解答する正答率は低く、言葉で表現・説明するのが苦手な生徒が多いことが読み取れる。さらに、得点分布グラフを見ると、平均点あたりの50～60点がかなり伸び悩んでいることがわかる。30～50点の層を引き上げることができれば、学年としての平均点が向上することが見込まれる。

〔社会〕

全体的に市内平均と同じような分布になっているが、40点台（平均より下の層）が多く、70点台（平均より上の層）が少なくなっている。それが市内平均を下回る原因である。トップクラスではなく、中間層の底上げをいかに行うかが課題である。

【今後に向けて】

〔理科〕

全体として、記述式の得点率が著しく低いことがいえる。これを改善するためには、「問題を読み解く力」と「考えを表現する力」を養っていく必要がある。授業の中でも、答えを導くことや文を読み解くことを苦手とする生徒も少なくない。暗記するのではなく、実験や観察を通して解答を導くための方法を指導していく。

〔社会〕

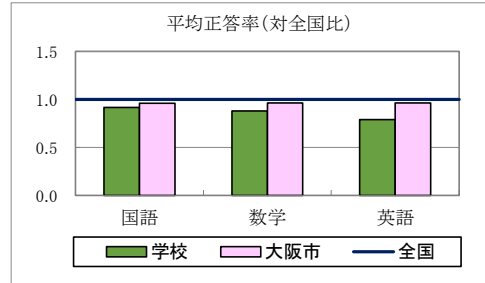
小学校時代の基本基礎的な知識の定着が他校に比べて遅れている。そのため中学校に入ってから知識の定着に相当の努力を要する。また地理に関しては、単元ごとのつながりが歴史に比べてなく、以前に学習した内容をもう一度復習しなおさないと、時間の経過とともに忘れてしまう。現状、毎時間集中して話を聞けており、基本基礎的な知識の獲得意欲は高いため、意欲の向上というよりは、より効果的な学習方法を構築する必要がある。

令和5年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

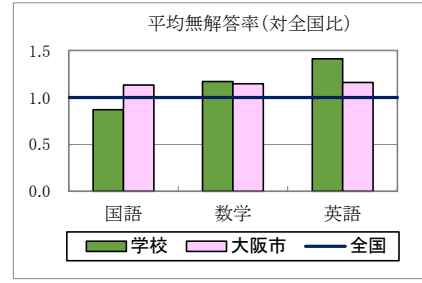
全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

【 全 体 】

	平均正答率(%)		
	国語	数学	英語
学校	64	45	36
大阪市	67	49	44
全国	69.8	51.0	45.6

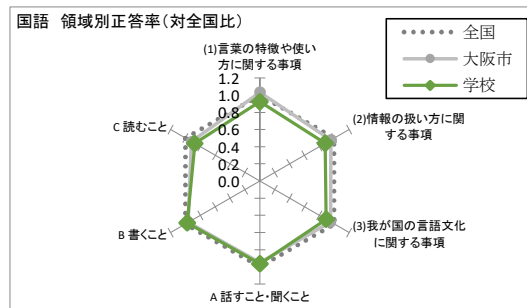
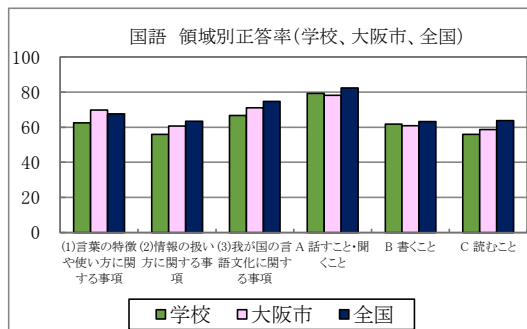


	平均無解答率(%)		
	国語	数学	英語
学校	4.0	11.2	8.0
大阪市	5.2	11.0	6.6
全国	4.6	9.6	5.7



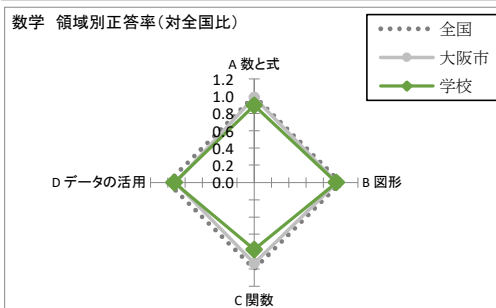
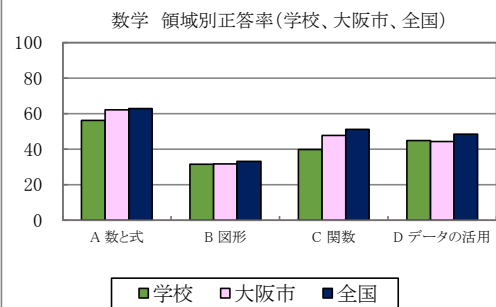
【 国 語 】

学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に 関する事項	2	62.3	69.8	67.5
(2)情報の扱い方に 関する事項	2	55.8	60.7	63.4
(3)我が国の言語文化 に関する事項	3	66.7	71.1	74.7
A 話すこと・聞くこと	3	79.2	78.2	82.2
B 書くこと	2	61.7	60.8	63.2
C 読むこと	4	55.8	58.5	63.7



【 数 学 】

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と式	5	56.2	62.1	62.1
B 図形	3	31.6	31.7	31.7
C 関数	4	39.7	47.8	47.8
D データの活用	3	44.9	44.2	44.2



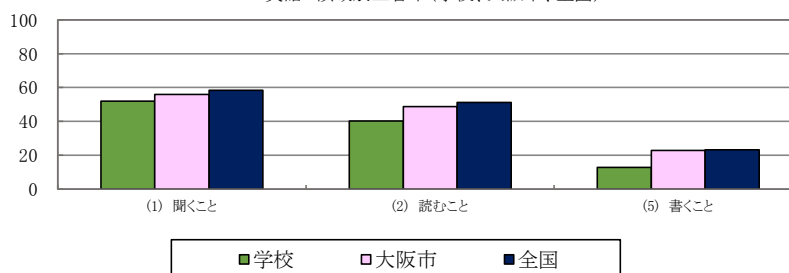
令和5年度 東生野中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

全国学力・学習状況調査 教科に関する調査より

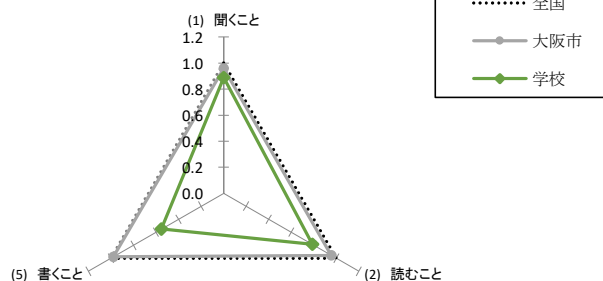
【英 語】

学習指導要領の 領域	対象 設問数 (問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1) 聞くこと	6	51.9	56.0	58.4
(2) 読むこと	6	40.3	48.9	51.2
(3) 話すこと〔やり取り〕	0			
(4) 話すこと〔発表〕	0			
(5) 書くこと	5	12.9	22.9	23.4

英語 領域別正答率(学校、大阪市、全国)



英語 領域別正答率(対全国比)

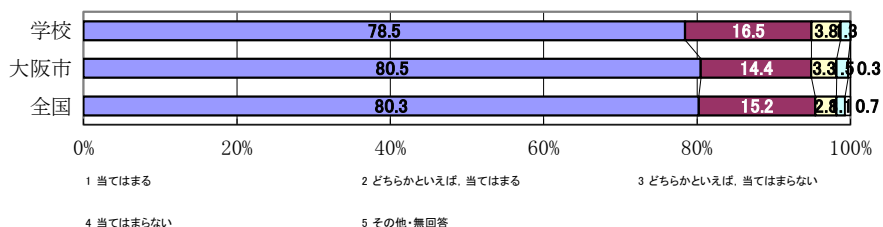


令和5年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

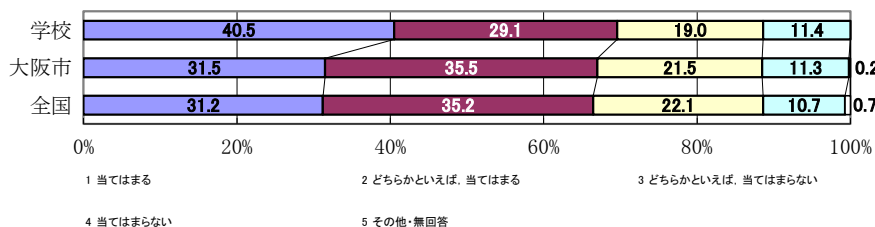
生徒質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8

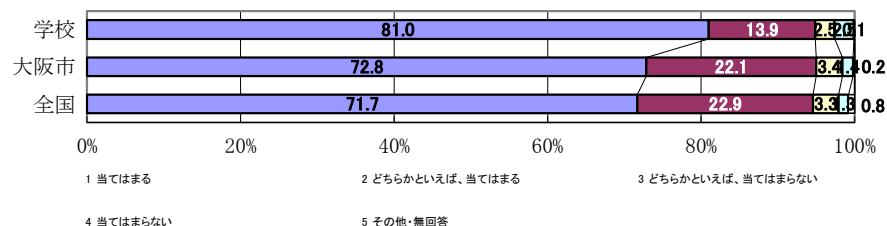
質問番号
質問事項
9
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う



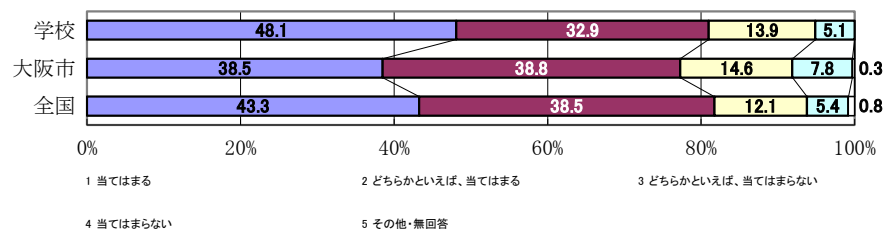
10
困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる



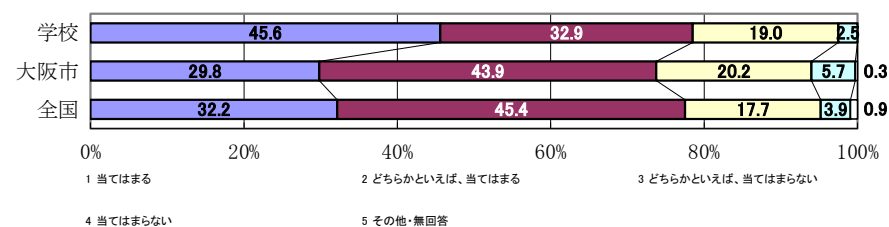
11
人の役に立つ人間になりたいと思う



12
学校に行くのは楽しいと思う



13
自分と違う意見について考えるのは楽しい



令和5年度 東生野中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

学校質問紙より

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

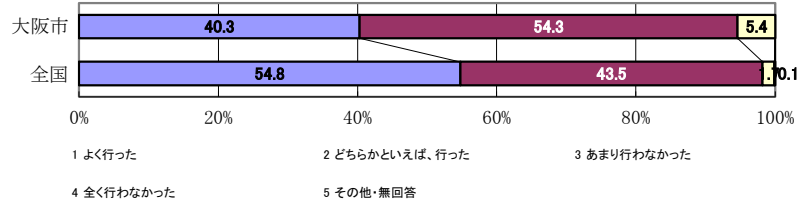
質問番号

質問事項

13

調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学校生活の中で、生徒一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する(褒めるなど)取組を行った

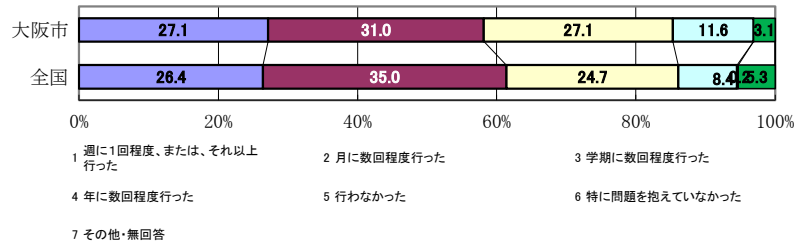
学校 「よく行った」を選択



14

校長として、よりよい学校運営を行うために、前年度に、教員が授業で問題を抱えている場合、率先してそのことについて話し合うことを行いましたか

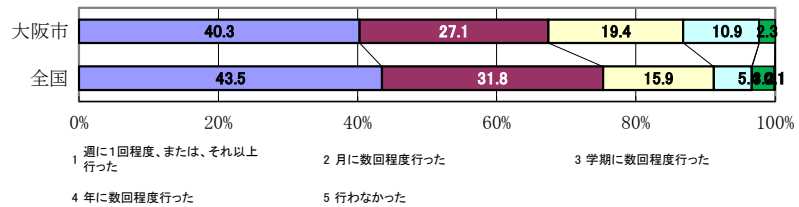
学校 「学期に数回程度行った」を選択



15

校長として、よりよい学校運営を行うために、前年度に、教員が学級の問題を抱えている場合、ともに問題解決に当たることを行いましたか

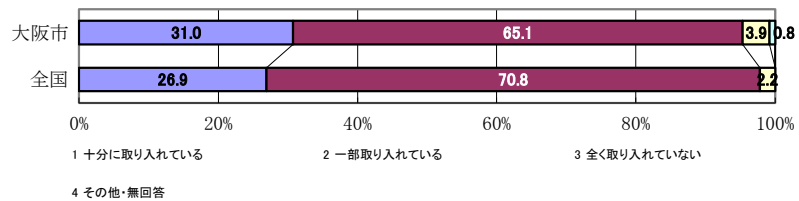
学校 「年に数回程度行った」を選択



16

ICTを活用した校務の効率化(事務の軽減)の優良事例を十分に取り入れていますか

学校 「十分に取り入れている」を選択



17

ICTを活用した校務の効率化の一環として、クラウドを活用した校務の効率化(クラウドサービスを活用した保護者への連絡や、アンケートの実施、教職員等会議のオンライン化等)に取り組んでいますか

学校 「一部の校務で取り組んでいる」を選択

